News & Scope
Handai Hospital
阪大病院ニュース
第3号
発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会（総務課）
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp

禁転載　（この紙面は再生紙を使っています）

住所／〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15　TEL／06-6879-5016

あらゆる部門のひやりとした経験

院内ネットで情報収集

4月スタートのクオリティマネジメント部

医療事故ゼロ目指す

ちょっとしたミスが重大な医療事故につながることがあります。阪大病院では、院内コンピューターネットワークをうまく使い、あらゆる部門のエラー情報を収集。原因を分析し、事故防止対策を立て、速やかに現場にフィードバックして、医療事故ゼロを目指しています。その中心となっているのが、今年4月に発足したクオリティマネジメント部です。1999年に横浜市立大学医学部で起こった「患者取り違え事故」を機に院内に設置されたリスクマネジメント委員会の実戦部隊ともいえます。

ミス把握のシステム

阪大病院では、お互いの失敗から学ぶシステムを構築することが事故防止のポイントだと考えています。病院内でどんなミスが起こっているのかを把握するために院内コンピューターネットワークを利用したインシデントレポーティングシステムを開発し、昨年から使い始めました。インシデントというのは、医療事故にはつながらなかった「ひやりとした経験」などをさします。

病院内では従来から看護部で「ヒヤリ・ハットとノート」を病棟ごとに置いて、原因を分析して、ミスをなくすように努めてきました。しかし、すべての職種からインシデントを集めて、病院全体で共有するシステムはありませんでした。

簡単に報告する工夫

同部部長の武田裕教授と中島和江副部長がつくりだした我が国で初めての電子化インシデントレポーティングシステムは、自分が犯したり目にしたインシデントをだれでも、どこでも、いつでも、簡単に身近にあるコンピューター画面で記入、データベースに送信できるように、工夫されています。

点滴にも目を配る院内の安全パトロール

コンピューター画面に現れる記入シートは、ミスを起こした職種、時間、場所やインシデントの内容などがあらかじめ書式化され、簡単な操作で記録できるようにしました。コメント欄もあり、より詳しい報告や再発防止策なども書き込めるようになっています。

送信されたレポートはデータベースとして保存、統計処理されるとともに、毎日、リスクマネジメント委員会の当番メンバーが、その日のインシデントのまとめをして、根本的な原因分析、予防策の提言を書き、他の委員に院内Eメールで回覧。各委員も意見があれば記入し、委員会としての予防策、改善策がまとまれば、クオリティマネジメント部がリスクマネジメントニュースとして院内ネットに流すとともに、院内新聞として各部門のすべてのリスクマネージャーに配布します。

重要な注意事項には「WARNING!（警告）」と大書されます。会議だけではなく、院内Eメールを使った迅速なアクションが、本院の事故防止体制の特徴の一つです。

原因分析　素早く改善

すべての部門から報告

このシステムに変えてから、これまでほとんどインシデント報告のなかった医師をはじめすべての部門からレポートがあがるようになりました。

これは、手書きの報告書と違い短時間で入力できること、匿名性が守られること、報告に基づいてアクションやフィードバックが実際に行われているからだと思われます。

安全パトロール実施

リスクマネジメント委員会は、安全な業務手順が各部門で守られているかチェックするために、委員2人1組で、すべての部署を定期的にパトロールしています。専任のリスクマネージャーである同部副部長の八田かずよ看護婦長はインシデントが報告されると直ちに現場に出向き、問題点をチェックし、改善に必要な支援をします。

99年には事故防止マニュアルが作成され、昨年からは全職員を対象にした安全教育プログラムが始まっています。このプログラムを受講した職員はネームプレートに「安全」と書かれたシールを受講回数分貼ることになっています。

医療の質向上に貢献

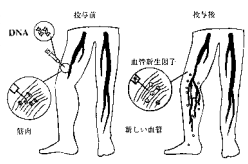
これまでの成果として、薬のオーダーシステムの見直し、異型輸血を防ぐための方法などいくつかの安全なシステムが導入されました。クオリティマネジメント部では事故防止だけでなく、医療の質の向上のために努力していきたいと、考えています。

阪大病院初の遺伝子治療

6月開始

第1回遺伝子投与

阪大病院で初めての遺伝子治療が、足の血管が動脈硬化を起こし、血液の流れが悪くなり、ひどくなると足の先から腐ってくる閉塞性動脈硬化症（ビュルガー病を含む）の患者さまに対して行われます。導入された遺伝子によって新しい血管ができ、症状が改善することが期待されています。



注射器によるHGF遺伝子の筋肉内への投与

閉塞性動脈硬化症の6人
血管新生を期待

閉塞性動脈硬化症は重症になると、安静時でも足に痛みがあり、足が腐って（医学用語で潰瘍、壊死といいます）きます。そうなると新しい血管移植か、足の切断しか治療法がありませんでした。歌手の村田英雄さんが同じ病気で足を失っています。この病気に対する遺伝子治療は、まだ臨床研究段階ですが、安全性が確認され、効果が認められれば、重症の患者さまにとっては体に負担の少ない治療法となります。

阪大病院で行われているのは、阪大医学部の腫瘍生化学教室、中村敏一教授が発見した肝細胞増殖因子（HGF）をつくる遺伝子を使った遺伝子治療です。肝細胞増殖因子は、肝臓の細胞を増やすファクターとして発見されましたが、阪大医学部遺伝子治療学、森下竜一助教授らの研究で、新しい血管をつくることがわかりました。

米国では、1994年から閉塞性動脈硬化症の患者さまに血管内皮増殖因子（VEGF）の遺伝子を利用した治療が行われ、詰まった血管の代替血管ができて効果が確認されつつあります。

今回の遺伝子治療の方法は、使われる遺伝子は違いますが、米国と同じ方法です。

足の血管の詰まっているところを事前の検査で確かめておいて、詰まった個所の上部と下部に2カ所ずつHGF遺伝子を注射します。数回の注射で、3週間から1カ月後に新しい血管ができはじめ、最終的には詰まった血管にバイパスができて血液の流れが良くなるのです。

今回の遺伝子治療は阪大の倫理委員会で承認され、今年5月には厚生労働省・文部科学省からも認可されました。治療を受ける患者さまは閉塞性動脈硬化症の6人です。今回の遺伝子治療は臨床研究の段階で、安全性を確認して、効果があるかないかを見るということを十分に説明して、この治療を受けることを納得されています。インフォームド・コンセントをきちんとしています。

6月25日に老年・高血圧内科荻原俊男科長による第1回の遺伝子投与が行われました。この投与はアレルギー反応が起こらないかなどの事前投与で、7月9日から本投与を始めました。

森下助教授は「阪大で発見された遺伝子を使った遺伝子治療が阪大病院で行われるなんてすごいことです。効果が表われれば、同じ病気で悩む人たちの希望になります。私はHGFをHappy Growth Factor（幸福を成長させる因子）の略だと考えています」と、話しています。

また、機能制御外科でも心筋梗塞の患者さまへのHGFを利用した遺伝子治療計画があります。

内科病棟の機能的運営のため
臓器・疾病別に統合
専門的なケアが可能に

阪大病院の病棟を機能的、効率的に運営するために、これまで医学部の講座名で分けていた内科病棟を内科系科として、昨年から臓器別、疾患別に統合されています。

それまでは、第一内科、第二内科、第三内科などと、医学部の講座別に病棟を分けていました。しかし、消化器に関しての疾患については第一内科でも、第二、第三内科でも診ていました。また、第一、第二内科とも循環器疾患を診る部門がありました。

そうすると、病棟で利用する医療機器なども消化器にも循環器にも対応できるだけのものをそろえなければなりませんでした。他の内科病棟でも同様の医療機器などをそろえる必要がありました。これでは、非常に効率が悪く、機能的でもありません。また、患者さまにもわかりにくく、運営上の欠点になっていました。

このため、昨年6月から病棟を循環器内科、消化器内科、腎臓内科、疾患別に再編成しました（図参照）。病棟で使う機器が共通になり、看護婦も専門的なケアが可能になりました。また、カンファレンス（症例検討会）の際も、第一内科、第二内科など講座の壁を越えたディスカッションが可能になり、きめ細かい治療方針をたてられます。

統合によるメリットは医療者側だけでなく、患者さまの側にもあります。より質の高い、医療、ケアを受けられることです。

外来診療は中之島地区から吹田地区へ移転した1994年から患者さまにもわかりやすい臓器別、疾患別にしています。

なお従来の神経内科は脳神経精神科診療部門に統合されています。

内科再編図

【従来の内科】
- 第一内科
- 第二内科
- 第三内科
- 老人科
- 血液・腫瘍内科

→ 内科系科

【再編成後の内科】

院内診療科名
- 循環器内科
- 腎臓内科
- 消化器内科
- 内分泌・代謝内科
- 呼吸器内科
- 免疫・アレルギー・感染内科
- 血液・腫瘍内科
- 老年・高血圧内科

学部学生が病棟で診療実習
クラークシップ
技能・マナー学び 医療の基本を体験

阪大医学部教育の一環として、5回生が病棟で診療にかかわるクラークシップが今秋から始まります。医師になるための貴重な実習ですので、患者さまにもご理解よろしくお願いします。

クラークシップは、日本語に訳すと、診療参加型実習。これまでの医学教育では、5回生になると「ポリクリ」を経験しました。5、6人が1グループになり、1～2週間ごとに各科を回りました。ポリクリは見学型実習で、患者さまのケアに参加せず、主に診療を見る実習でした。

医療の質を上げるためには医学部時代から実践的教育が必要との考えから、阪大でも昨年から取り入れています。

クラークシップは内科系、外科系の病棟で学外の病院も含めて3週間ずつ行われます。

1人の学生が原則として1人の患者さまを担当、指導医や主治医とともに、患者さまの受け持ちとなります。医師の手伝いだけでなく、看護婦を手助けしたり、検査に同行したり、患者さまが手術を受ければ、担当医と一緒に手術に参加し術後のケアもします。学生たちはクラークシップで、医療チームの一員として、医療に参加することになるのです。

クラークシップ担当の平出敦・総合診療部講師は「患者さまとのコミュニケーションをとり、病棟での診療を実際に経験することで、医師としての基本的な知識や技能だけでなく、エチケット、マナーを学べます。医師になったときに必ず役立つ体験です」と、話しています。

クラークシップを行う学生は試験に合格しなければなりません。

5回生の試験風景
（上）聴診　（中）血圧測定　（下）縫合

医師会便り

大阪大学医学部医師会会長　松田　暉

大阪大学医学部附属病院は、地域医療に積極的に貢献し、病診連携の円滑化を図るために、大阪大学医学部医師会が中心となり吹田市医師会の協力を得て、1993年9月に地域医療連絡室を設置。①研修登録医制度の普及広報②本院で開催する研究会・抄読会等広報③紹介患者さまの受け付け及び診療予約④高度医療に関する情報の提供⑤その他の医療の連携、等の業務を行ってまいりました。

今年4月、これまで以上に地域医療連携を推進し、病院機能の向上を図るために、従来の地域医療連絡室を改組して保健医療福祉ネットワーク部が開設されました。これにより従来の紹介患者さまの受け入れのみならず、退院・転院患者さまの逆紹介も含めた幅広い病病連携、病診連携を推進していくことが可能となりました。また、在宅患者さまに対する退院後のケアのために、専門看護外来を設け、医療ソーシャルワーカーも配置していく計画です。

地域医療連携の推進

これ以外にも、大阪大学医学部附属病院では、診療情報を共有して病診連携、病病連携のさらなる効率化を図るために、インターネットを介した電子カルテの実験的運用を準備中であり、地域医療連携は今後さらに推進されていくものと期待されます。

（大阪大学大学院　医学系研究科　未来医療開発専攻　臓器制御外科　教授）

4回生から医療面接、仕方、縫合、糸の結び方などの基本手技を学びます。医療面接では身体診察法をはじめ、阪大病院の医療ボランティアの方たちの協力で、患者さまとのコミュニケーションのとりかたを学びます。5回生の6月に、やはりボランティアの人たちの協力を得て、試験があり、それに合格すれば、秋からクラークシップを行うことになります。平出講師は「趣旨を理解して協力をよろしくお願いします」と話しています。

ホスピタル ミニニュース

ふれあい看護を体験

日本看護協会は、5月12日を「看護の日」、その日を含む1週間を看護週間とし、多くの病院で一般の方々に実際に患者さまの看護を経験していただく「看護体験」を実施し、10年が経過しています。阪大病院でも、新病院移転後毎年行い、今年で計97人が参加されました。当日、体験者は白衣に着替え、指導看護婦と一緒に、血圧測定や清拭・洗髪、車イス介助による散歩、患者さまとの会話等を経験し、看護への認識を新たにしていただきました。

移植手術の患者さまが退院

5月18日、阪大病院で脳死肺移植を受けられた患者さまが退院されました。この患者さまは、今年3月19日に、日本で初めての両肺移植手術を受けられましたが、阪大病院の肺移植では3例目になります。また、同じく阪大病院では4例目となる心臓移植を今年2月に受けられた患者さまが5月23日に退院されました。それぞれ退院の日に記者会見が行われましたが、お二人とも脳死での臓器移植を受けた患者さまでは初めて元気な姿を新聞やテレビで映し出されることに応じられました。

搬送の児童4人を治療

6月8日午前11時ごろ大阪教育大付属池田小学校の乱入殺傷事件で児童3人が阪大病院救命救急センターに運ばれました。うちお一人は来院時呼吸停止の状態で、12時32分逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。他の2人の児童は一命を取りとめ、さらに他院から転院してきた1人の児童とあわせて3人が治療中でしたが、7月9日までに3人とも退院されました。この間、遠山敦子文部科学大臣や池坊保子文部科学大臣政務官がお見舞いに来られました。

一番安全であるべき施設において起こった事件だけに、本院でも夜間等の出入り口を限定し、警務員の増員を図りました。

尾身幸次大臣が本院を視察

7月3日、尾身幸次沖縄・北方、科学技術政策担当相が来院され、科学振興についての政府及び大臣の構想を説明されました。松澤病院長から本院が我が国に先駆けて実践してきた移植医療や遺伝子治療、未来医療実践センター設置構想などの説明を受けられた後、ヘリポートと遺伝子治療用病室を視察されました。

美しい音色に包まれ 七夕コンサート開催

7月6日午後6時半から阪大病院エントランスホールで、恒例の七夕コンサートが開かれました＝写真。今回の出演は、相愛大学音楽学部2年生の榎谷優子さん、中須賀紗織さんと、大阪大学マンドリンクラブの学生ボランティアのみなさん。榎谷さんはヴァイオリンで「タイスの瞑想曲」など8曲を演奏、会場は榎谷さんの奏でる美しい音色に包まれました。マンドリンクラブのみなさんは「慎吾ママのおはロック」「アンパンマン」などを演奏、会場には一緒に口ずさむ子供の患者さまもおられました。

質問箱

Q 外来通院中ですが、夜間等に病状が悪化したとき病院の代表電話に連絡しましたが、どうしたらいいか分からなくて困りました。

A 夜間（午後5時半以降）と土・日・祝日は、電話交換業務を休んでいるため、テープによる案内をしています。代表番号06・6879・5111は、病院だけではなく医学部、歯学部、歯学部附属病院の案内もしていますので、少し分かりにくいかもしれません。追加ダイヤル方式という方法で番号を案内しています。聞きたい案内の番号をどの時点でも押していただければ、その案内に切り替わります。外来通院中の患者さまの急変の際は基本的に診察の要否あるいは診察の可否等を当該診療科（12番）の当直医とご相談いただき、決めていただくことになります。その他の案内としては、11番では診療受付、面会、交通手段を、21番ではその他緊急のお問い合わせ先として事務当直を案内しています。